

信者の大前提 (マルコ 12 : 13-17)

パリサイ派とヘロデ党は、普段は敵対関係にあります。しかし、イエス様を攻撃するためには、お互いに協力するところが今日の聖書から見られます。それでパリサイ人とヘロデ党の何人かをイエス様のところに送って、イエス様に言葉巧みに質問をぶつけます。「今現在、イスラエルはローマの植民地です。それでローマの皇帝カイザル、つまりローマにイスラエルの人が税金を納めるべきでしょうか。納めてはいけなんでしょうか。あなたは曲げずにありのまま真理を教えている方なので、隠さずにちゃんと答えられるでしょう」という意味で質問しました。となると、イエス様が税金を納めるべきだと答えると、それは律法に違反することであり、あなたはイスラエルの裏切り者になり、そして、それは神から離れて神様への信仰を裏切ることになるだろう。何がキリストなのかと言えるわけです。そして、イエス様が納めてはいけませんと答えたら、ヘロデ党の人からすぐにこれはローマ帝国に対して反乱を起こすことなんだ。だから逮捕うしないといけないということになるわけです。つまり、どっちにしても大変なことになるだろうと信じて、そのような質問をぶつけることでイエス様を罠に陥れようとしたわけです。このような質問をぶつくと、必ずイエス様は罠に陥れられるようになるだろうと信じていたのです。しかしイエス様は、彼らの悪巧みを見抜いて、「銀貨を持ってきなさい。ここに誰の顔が書いてあるのか」「カイザルですよ」。それで「カイザルのものはカイザル、神のものは神様に」とおっしゃって、彼らは何も文句を言うことができないまま解散されることになりました。つまり、イエス様を罠に陥れようとしたことが無駄なことに終わってしまったということなのです。彼らはなぜイエス様にこのような質問をぶつけて、この質問なら必ず罠に陥れることができるだろうと思っていたのでしょうか。それは彼らがイエス様に対して彼らなりの先入観、前提を持っていたからです。イエス様はキリストとは思わないで、イエス様も私たちと同じ人間だろう。イエス様がただ偉いかもわからないが人間だという前提があったのです。しかもイエス様はガリラヤ出身のイスラエル人だろうと。それは間違いありません。イエス様は人間でイスラエル人だろうという前提でイエス様のことを見ていると、そのような質問によってイエス様が困るだろうと思うようになるわけです。でも結果的にその前提が間違っていたので、彼らの画策というか、それは失敗に終わってしまいました。このように自分なりにこれはこうだろうという先入観、前提というものが間違っていた場合には、それが無駄な争いや葛藤をもたらすだけのことになってしまうということが、今日の聖書を通して読み取れる内容です。信者の私たちはこの世を生きているものなのです。イエス様を信じて救われたからといって、この世から離れて別世界を生きるわけではありません。しかし、この世を生かされているものでありますが、この世に流されることなく、この世に打ち勝って、この世をしっかりと助けることができるためには、信者としての正しい前提を持たないといけません。その時に私たちは世に振り回されることなく、この世を生かすことができるようになります。前提というのは、これほどとてもとても大切な内容になります。なので今日、礼拝を通して信者の私たちがどのような前提を、何があっても揺れることなく、譲ることなく、忘れることなく前提にしなればいけないものは一体何なのかということを確認していきましょう。

1. 神の民という大前提で、世の価値観にとらわれず世を生かせる。

第一に、私たちがイエス様を信じて救われた信者ならば、私は神の民だという大前提に立って、そのときに世の価値観に囚われることなくこの世を生かすことができるようになります。

もう一度言います。私たちはこのよう生きる者に間違いありません。にもかかわらず信者ならば、この世を生きる人間である前に、神の民だという大前提の上に立っていなければなりません。大前提なのです。状況がどう変わろうが、自分の条件がどんなに厳しい時であっても、その前に自分の存在そのものが神の国の神の民であるという大前提の上に立っていないといけません。

1) 多様な価値観

世の中には多様な価値観が飛び交っています。保守的なものを価値だと思ふ人もいます。反対に、リベラルな進歩的な思想を持って、そこに価値を置く人もいます。また、そういう社会もあります。また、民主主義が価値あるものだと思う世界があるし、反対にそれではチンプンカンプンになるので、独裁主義の方が国を

まとめることには得するんだという価値観の場合もあります。また、資本主義が経済的に豊かになる方法だが、格差が生じるので共産主義の方が理想的だという価値観がこの世の中に流れているものなのです。その他にもさまざまな価値観が世の中にはあります。これが個人的に、社会的に、あるいは国家的にさまざまな違いというものを持って世の中を生きているわけです。

2) 対立と葛藤-限界

しかし、私たちが今見ているように、今までの歴史を通して証明されたように、価値観そのものが悪い良いと言う前に、それはいつも互いに対立するものでした。対立するので葛藤が生じて、その葛藤が終わることなどはありません。それが世にある価値観というものなのです。つまり、裏を返しますと、世にある価値観は仕方がなく必要なものでしょうけれども正解ではない限界あるものだという裏返しではないでしょうか。

3) 3、6、11

なぜかと言いますと、結局世の中の人々は知らないでしょうけれども、世にあるどんなに立派な、どんなに多くの人に従っている価値観であっても、それは神様を離れて以来、自分中心、また目に見えるものが中心で、永遠の世界などは意識も気づきもしないまま、この世界がすべてだと思って、それを基礎にしてそこから生まれた価値観だからそうなるしかないものなのです。

4) 政治家のあおり-ナショナリズム

特に、政治家などは自分の権力を維持するためにこのような価値観を国民にぶつけることでナショナリズムの方にもっていくわけです。私たちの国が最高なんだ。私たちの国だけが正解なんだ、というのがナショナリズムです。特にそれには愛国心、愛国という大義名分を取り上げて国民を煽るわけです。ナショナリズムの方に。それでナショナリズムの方に入りますと私たちの国だけだ、私たちの国がとなるので、結局どこに力を入れるかと言いますと軍事力を強くせざるを得ません。その価値観、その論理に乗ってしまいます。結果、戦争に発展するしかありません。それが今までの歴史の繰り返しでした。今も私たちはそういう現象を見ているわけです。戦争を直接している国はもちろんのこと、それを裏から煽る国々も、結局はナショナリズムがその根底にあり、時代ごとにこれが強くなる時期というのがあったり、ブームになったり流行ったりする時代がありました。まさに今がそういう時代ではないかと見ているのですが、とにかくそのようなこの世に私たちは生かされている者、生きていく者なのです。なので、ここで信者の私たちが、自分は神の国の民なんだという大前提がなければ、このような世の価値観と一緒に流されて、世との間に葛藤が生じて、その葛藤が絶えなくなります。なので、世に対してクリスチャン、信者としての役割を果たすことができないまま混乱しつつずっと流れていくようになってしまいます。しかし、このような価値観、このような世の流れの中を生きてる信者の私たちが、私は神の民なんだ。日本人である前に韓国人、アメリカ人である前に、黒人、白人である前に私はこの世を生きる者でありながら、実は神の国の民なんだということを大前提にすれば、国も超えて民族を超えて、すべての国々、すべての民族を視野にいれることになります。なので、私たちの国が正解で、あなたの国は不正解、私がえらい、あなたはダメというナショナリズム的な価値観に流されることなどはありません。結局、いまパリサイ人たちが、今日イエス様にこのような質問をぶつけたのも、イスラエルのナショナリズムを煽って聞いたわけです。そういう価値観に基づいて。神様はイスラエルの神様なんだという大前提があったわけです。しかし、それでは答えに困って葛藤になるしかないでしょう。それは神様に対しての誤解なのです。神様はイスラエルだけの神様ではありません。全世界の神様、ローマもさまざまな理由があって神様が許されただけですが、ローマも神が支配なさっている国なのです。神は宇宙を造って統べ納めていらっしゃる創造の神様なのです。でもイスラエルの人は勘違いして、ヤーウエの神様はイスラエルの神としナショナリズムの方にそれをくっつけていたわけです。それで世界を救うために来られたキリストに質問をぶつけると、チンプンカンプンになるしかありません。信者の私たちも教会に通いながらイエス様を信じますと言っているながら、この大前提がないと結局は振り回されるようになるしかありません。世界中の多くの教会がナショナリズム、あるいは世の価値観などに染まって振り回されているのではないのでしょうか。神様はすべての民族、国と肌色などを超えて、神の救いが必要なんだ。神の愛が必要なんだ。世界は国と民族と肌色、さまざまな違いがあるにもかかわらず、みな共通して神の愛とキリストの救いが必要な共同体なんだという見方を持つようになります。私が神の民という前提の上に立っていれば。でもほとんどのクリスチャンは、自分は日本人だ、自分はアメリカ人だ、それが大前提なのです。もち

ろん否定するつもりはありません。でも、イエス・キリストを信じて受け入れたなら、このパリサイ人のようになってはいけないのではないのでしょうか。それをすべて超えて、神の国の民なのです。

5) ヨハネ 3:16、使徒 1:7-8

だからヨハネ 3:16「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」。イスラエル愛されたのではなくて、日本を愛されたのではなくて、この世を愛された。そのような見方、そのような感覚を持つようになります。私は神の国の民なんだという大前提の上に立ちますと。イエス様が最後におっしゃいました。弟子たちがいまだにナショナリズムのようなものに囚われています。理解は充分できます。植民地なので。私たちの国が解放される時は今でしょうかと聞いた時にイエス様は、あなたがたは神の国の民でしょ。それを超えていかないといけません。それでおっしゃったのが地の果てにまで。これが神の民という前提の上に立った時にそこから与えられる見方というものです。だから、世の価値観に囚われること、振り回されることなどありません。そうでないと信仰そのものが葛藤の原因になります。税金を納めるべきなのか、納めてはいけないのか。日曜日に礼拝に行くべきなのか勉強すべきなのか。今、政府や社会のさまざまな悪いことに対してデモンストレーションをやっていますが、それに参加するべきなのか、参加してはいけないのかという葛藤の中で曖昧な中途半端な歩みをするしかありません。しかし、クリスチャンはそういう存在ではありません。私は神の国の民なんだという大前提の上に立ったときに、そのすべてを超えて悪い人間にも良い人にも神の救い、神の愛が必要なのです。境界線などありません。何かを区別するような差別するようなこともありません。パウロもキリストにあつて、ギリシャ人も異邦人も、律法あるものもないものもみな一つなんだと言っていたわけです。皆さん、いかがでしょうか。自分は神の国の民なんだということが本当に大前提になっていらっしゃるのでしょうか。そこを吟味して見ていただきたいと思います。だから、自分は神の国の民なんだという大前提をもっていれば、すべてを超えてそういう見方を持つようになりますが、その結果、二番目です。

2. 神の民という大前提で、世を宣教地と見て世を生かせる。

神の民という大前提の上に立つことで、この世を宣教地として見て、この世を生かすことができるようになります。この世は世界平和のためにあるところではありません。宣教地です。なぜ戦争をしてるのでしょうか。もちろん、背後には悪魔サタンの煽りというものがありますが、みな世の価値観というものに囚われているので、それがぶつかり合って結局戦争にまで発展して行くものではないのでしょうか。私たち信者は違います。神の民なので、その前提に立って、この世を見たときには、この世は宣教地なんだ。この世は私の成功のために、目的を達成するためにあるところではなくて宣教地なんだと。だから、聖書は私たちにこのように明確に言っています。イエス様ご自身が最後の晩餐の時におっしゃいました。ヨハネ 17:18「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました」。

1) 派遣された者

つまり私が神の国の民という前提の上に立つということは、私はイエス様がこの世に来られた理由と同じ理由でこの世に派遣されている身なんだということなのです。自分が派遣されているものなのです。だからパウロはキリストの使節という言葉を使いました。つまり、キリストの大使です。元々キリストが直接動くべきなのに、その代わりに大使として。日本に来ているアメリカの大使という方は、日本に生きているのですが、日本の地に住いを構えているのですが、アメリカを代表してここに来てるわけです。私たちがさまざまな職場、いろんな現場、いろんな状況の中を生きています。しかし、私たちはそこが目的ではなくて、神の国から派遣されているものだと。なぜその感覚、その意識がないのでしょうか。それは自分は日本人である前に、子どもである前に、大人である前に、男性である前に、女性である前に、金持ちである前に、貧乏である前に、病弱の人間である前に、健康な人間である前に、私は神の国の民という前提をもっていないからです。前提はととてもとても大切なのです。今日の聖書を通して確認しました。前提が間違っていると質問も間違っているし、無駄な方向に行くしかありません。皆さんの祈りの課題や疑問なども、もしかしたらその前提そのものが間違ってるからそういうものになっているのではないのかということを吟味しなければなりません。

2) 神の願い(救い、世界福音化)

なので、どこの現場、どの時代を生きるクリスチャンでも派遣された者なので、神の国の大使なので、何のために派遣されているかといいますと、神の国の大使なので、神の願いのために派遣されているわけです。アメリカ大使はアメリカの利益のためにここに派遣されているわけです。この神の願いこそが罪人の私たちが救われることであり、しかも世界中のすべての人が救われる世界福音化というものなのです。これが神の願いです。そのために私は派遣されています。

3) 神の主権を認め、神の願いに従い、聖霊の導きを

これが明確になればそのために神様がその神の願いのためにすべてを統べ治め、動かしていらっしゃるといふ信仰を持つようになります。それを神の主権と言います。大使は自分勝手な個人的なことをやるものではありません。国の仕事やる者です。国が責任を持ちます。なので、自分が神の民だという大前提に立っている者は、神の主権を認めることになり、神の願いに従って、自分の意見、自分の趣味、自分の趣向ではなくて、聖霊の導きを受けることになります。パリサイ人が見たときにはこれが正解、あれが正解というふうに思っていたのですが、それに当てはまることなどありません。聖霊の導きを受けるようになります。だからこれが正解、これがペケ、これが○となっているものは私たちには当てはまりません。でもクリスチャンでもこの前提がなければ、いつもそれに振り回されます。赤信号を歩くべきなのか、渡ってはいけないのか。私は知りません。分かりますか。これはルールを破ってもいいという話ではありませんが、私たちは世にある価値観やルールに縛られるものではなくて、神の国の大使なので神の主権を認めて、神の願いのために聖霊の導きを受けるわけです。聖霊の導きを受けるとこの世においてどのような姿勢を持つようになるのかと言いますと、この世から逃げるなどありません。神の願いがこの世を助けることなので。そしてこの世と妥協することもあります。これが聖霊の導きなのです。この世は救いの対象なので、妥協する相手ではありません。それでこの世を生かす者としていつもその姿勢を保つようになるでしょう。これが聖霊の導きです。世のさまざまなことに対して、そして、この世との間に葛藤を覚えたり、争いをしたり、復讐の思いを持っていたり、恨んだりするようなことはしません。それは聖霊の導きではありません。わかりますか。

4) 優先順位を明確に

それであらゆることに対して優先順位を明確にするようになります。それがイエス様がカイザルのものはカイザルに、神様のものは神様にとおっしゃったその一番の意味なのです。カイザルのものはカイザル、神様のものは神様。つまりカイザルに税金を納めるからといって神様への不信仰になったり、神様にやるべきことができないということはありません。優先順位の問題なのです。先ほども申し上げましたように、神の主権を認めて神の願いのためにという大前提の上に立って聖霊の導きを受けますので。優先順位です。カイザルに税金を納めたから神様に献金をささげる献金は私にはありませんということはありません。そういう意味で「税金を納めない方がいいのではないですか」と今聞いてるわけです。そんなことはありません。ローマの国も神の願いのために神様が許されたものであり、何よりも税金を納めるからといって神様に捧げるべきものを捧げるということは絶対であり優先です。それに何の問題も生じません。両方、優先順位の問題です。私たちはこの世を生きるためにさまざまなことをしなければなりません。学生は勉強しなければなりません。大人は仕事などしなければいけません。家族も養わないといけません。それをおろそかにすることは聖書の教えではありません。ちゃんとやらなきゃいけないのですが、しかしそれも神の願いのためなのです。ならば、その勉強が仕事がその家事がさまざまな自分の個人的ないろいろなことが、神に向かうことに邪魔になるということは、もはや成り立っていません。もはや矛盾してる内容です。みな世の価値観に縛られて、神の民という大前提を失っているのです、それが全部葛藤になってしまうのです。葛藤ではありません。神の願いのために勉強を大事にしないといけません。仕事をしっかりやらなきゃいけません。家庭をちゃんと養い守っていかないとはいけませんけれども、そのために優先すべき内容は礼拝を優先しないといけません。それがすべて神の願いのためであれば礼拝を大事にして優先して、礼拝を通していただきましたみことば、恵みをもって個人的に祈ることを優先しないといけません。そして、霊的に整えられるためにさまざまな訓練があります。その訓練を大事に優先しないといけません。そして、お金を使うところがたくさんあるんでしょうけれども、そのすべてが神の願いのためであれば教会に捧げる献金を優先しなければなりません。これが矛盾していたり、葛藤になるようなことは前提が間違っているのです。何のために勉強しているのでしょうか。何のための結婚なのでしょうか。何のための健康管理なのでしょうか。何のため

の仕事なのでしょうか。一人の大黒柱で仕事場に行くわけですか。神の国の民として行くわけです。この前提が薄れているので、あるいは最初からその前提などは礼拝の時だけで、礼拝が終わると全部引き出しにしまっておいて、それから現場に向かっていくのでそういう前提がないのです。未信者と同じなのです。となると、パリサイ人が予想していたような葛藤や争いなどに巻き込まれるようになるしかありません。皆さんの生活と信仰と礼拝がぶつかり合うようなことになってはいけません。それは礼拝や信仰が厳しいからではなくて、みな一生懸命勉強してるのに、その時私が礼拝を捧げるから勉強にマイナスなんだという考え方そのもの、前提が間違っているわけです。違います。前提が間違っているからいつも悩みであり、いつも葛藤なのです。なんで葛藤するのでしょうか。その勉強が神の願いのためであれば、神の願いのために霊的に恵まれて霊的な力を身に付けることが大優先ではないのでしょうか。それでこそその勉強が勉強として成り立つようになるでしょう。これがカイザルものをカイザル、神のものを神の方にとおっしゃっていたその内容です。しかし、パリサイ人はその前提がありませんでした。イエス様はイスラエル人であり、人間だという前提でその質問をぶつけたので、結局争いや無駄な葛藤などを予想するしかありませんでした。

なので、改めて私たちが一回限りの短い人生ではありますが、この世を生かされてる者なのです。生きている者でしょうけれども、正確に申し上げると生かされている者なのです。古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなりました。だから、自分がそこら中の人と一緒にだと思っただけは前提そのものが間違いなのです。皆さんが社会的な身分や地位において少し劣っているとしても、前提は神の国の民として生きるわけです。会社に就職して末端社員になったとしても、末端社員でありながら、その前に神の国の民として会社に来てるわけです。ならば世の価値観に囚われることなく、それを超えられるようになります。それを神の愛と言います。愛に境界線などありません。愛に区別、差別などは存在しません。私たちには愛のほかに選択肢がありません。それだけです。信仰のほかに選択肢はありません。それがすべての世にある価値観やルールを越えて行く力なのです。それで神の民という大前提に立ちますと世に振り回されることなく、この世を宣教地として見て、この世を生かす主人公になります。だからこそ葛藤や矛盾を覚えることなく優先順位を明確にします。勉強のためにも礼拝を通して恵まれなきゃいけません。仕事がちゃんとできてうまくいくという意味ではありません。結果的にうまくいくでしょうけれども、仕事がしっかり正しくできるために礼拝をして恵まれなければなりません。礼拝のメッセージ、その恵みを握って個人的に祈る時間を持つことが優先なのです。自分でどうすればいいのか。これが正しいかどうか考えることはやめましょう。私たちは考えれば考えるほど 3.6.11 の方に引き込まれるようになります。だからクリスチャンは考える人でなくて祈る人なのです。祈りは何でしょうか。自分で考えながらそれをぶつけるわけではなくて、神のみことばを黙想してそれを祈るわけです。そのためには考えをストップしないとはいけません。これからどうなるんだろう。どっちが正しいのか。そういうことはストップです。御座を見あげて祈ることです。キリストにある神のみことばを握って祈ることです。それを優先したいと思えます。カイザルのものはカイザル、神のものを神に。

なので私たちは、信者のアイデンティティーを改めましょう。私たちは世の光と言われているものです。そして、神の神殿と呼ばれるものです。なぜそう言われるのかと言いますと、イエス様がおっしゃいました。「心の貧しい者は幸いです。天の御国がその人のものだから」。地上を生きていて肉体を持っているのですが、ほかの人にはない天の御国、神の国を持っている者なのです。だからすべてが変わるのです。神の国の民として今日の一日も生きるわけです。学校も神の国の民として。濡れ衣を着せられたときにも神の国の民として着せられたので見方が変わります。神の国の民。エペソ 1:23 には、私たちはキリストのからだなる教会と言われています。I ペテロ 2:9、あなたがたは王である祭司、この世に光を照らすために召されているものなんだ。このアイデンティティーを一瞬たりとも忘れてはいけません。忘れないだけではなくて、どのような場面でもいつでもこれを大前提として持ち出さないといけません。自分が弱いか強いか状況がよろしいか、あるいはダメなのか、こういうことに振り回されることなく、これが大前提なのです。この世を生きているけれども、神の国の民なのです。派遣されてる身なのです。それで優先順位を改めましょう。皆さんに優先順位は本当にどういうふうになっているのでしょうか。キリストが Only として自分に刻印されることを大優先しなければなりません。それで自分の内側に神の国がしっかり立つことが大優先なのです。それでこの世を生かすために聖霊の力によってしっかり整えられることでこの世を生かすことができるようになります。しかし、このような内容が優先にならないと、この世との間に葛藤を覚えて、ずっとそのままの状態です。クリスチャンでありながらももやもやがずっと続いて、全力を發揮するこ

ともできないまま荒野ぐるぐる回ると同じ状態がずっと続きます。なんでだろう。どうしたらいいんだろう。そういうことばかりなのです。そうする必要はありません。前提を変えましょう。前提に釘を刺しましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。イエス様のことを間違っている前提でぶつけた結果、失敗してしまったパリサイ人を見ながら、私たちはこの世を生きているものでありますが、神の国の民である大前提をしっかりと回復して、実際にそれを優先に持ち出して、自分を改め、優先順位を改めて、この世との間の葛藤がすべて消えてなくなり、しっかりと使命者として、宣教地を歩くものとして主が導いてください。感謝してイエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン